

皆さんペーパー・ミュージアムって、ご存知ですか？

(株)NJS日本住宅新聞社

北川 美代子

木と近い関係にある紙、その紙から作られるペーパー・ミュージアムの作品を、今日ご紹介したいと思います。

私は東京都清瀬市に住んでいます。テレビの天気予報の画面に出てくる東京都の地図、その真ん中あたり、上方に三角形の形に飛び出たところが清瀬市です。その清瀬市に、私の母校である日本大学を卒業した人達の集まりがあります。名称は「清瀬桜門会」、今日ご紹介する太田隆司さんはその仲間です。

太田さんは子供の頃から絵を描くことが大好きでした。観察力に優れ、いろいろなものを模写することが得意でした。その力をもって日本大学芸術学部に入學、大学でも模写する力は教授を唖らせましたが、そこで“オリジナリティ”という壁にぶつかります。「さてどうしよう?」、持ち前の器用さに悩まされた時期もありました。

でもご心配なく、太田さんとはとにかく器用なのです。ある日描いた絵を切り離して、背景や人物と重ねてみました。想像以上のリアリティが生まれ、それは一枚の紙に描いた絵とは異なる魅力を放っていました。大学4年生の時、太田さんはイラストレーターとしてこの手法をもって勝負しようと思いました。

まず太田さんは、クルマ好きの人達の間で有名な月刊誌、“カーグラフィック”という雑誌を出版している会社を訪ねました。太田さんは元々クル



太田さんのアトリエ。完成したばかりの作品と切り残された紙



スタジオではスクリーンに季節の空を投影して撮影します

マが大好き、模写するのも大得意だったのです。「定期的に作品を発表できれば嬉しいな・・・」、そんな
思いで訪ねましたが、結果は大成功。その後太田さんの作品は今日まで24年の長きに亘って、毎月同誌
の目次対向ページに掲載されています。



情景を流れるように切り出すことでスピード感を表現します



パーツに千枚通しで丸味をつけます



すべてのパーツは丸味をつけることで立体感をもちます



洋服等は生地に合わせた紙を選ぶことで生命感が出ます



トーンの違う赤を重ねハイライトにエアブラシを入れます

太田さんの作品には、クルマ、人物、犬が、ほぼすべてに共通して登場します。場面はさまざまで、昭和レトロを感じる懐かしいシーンもお得意です。初期の頃の作品のサイズは当時のエアコンの厚さにほぼ等しい17センチメートル、「家に置いておいても邪魔にならないサイズ」にしました。現在は作品数も増えて、厚みは25センチメートルになっています。

作品で使用する紙の種類はゆうに100種類を超えます。紙のもつ質感、色で、登場するさまざまなものを表現します。制作の手順は、人物、クルマ等それぞれを個別に描き上げて、線画で場面を完成させます。次にそれらを切り出し、型紙を色紙の上に当てて切っていきます。

その時、色の付いた紙を、型紙より少し大きく切るのがポイントになります。

色の付いた紙を少し大きく切るのは、切り出した後で立体感を持たせる細工をするためです。切り出した人物やクルマの端に、千枚通しを使って膨らみをもたせるのです。膨らみに光があたると、人物やクルマは立体的なもののように見えます。それらを丹念に配置し、25センチメートルの厚みの中にひとつの物語を作り上げるのです。

作品はまず写真に撮ることを考えて作られます。ライトを当てて生き生きとした場面を演出し、それを写真に写し撮ります。写真は一方向から見た平面で表現されていますが、最近は動画を使った他方向からの立体的な表現にもチャレンジしています。作品のもつ奥行きが活かされ、平面にはない魅力が引き出されます。

ディズニーランドのカレンダーにも採用されている太田さんの作品ですが、私はいつも「森や木材に関係した世界を表現したら素敵なのでは・・・」と思っています。紙を重ねて作る温かみのある表現方法は、「木」が醸し出す世界ととても相性が良いように思います。具体的なアイデアはまだ思い付きませんが、いかがでしょう、皆さんも一緒に考えてもらえませんか？



クルマは約20ミリの厚さで作られています



台湾の展覧会でメインビジュアルになった作品「東京駅」です



木から生まれる紙は日本の情景をやさしく伝えます